

# 暮らしの 風景を たどる旅

暮らしはとて便利になりました。  
電気、水道のインフラ、そして防災。  
その影に実は、土木遺産があります。

現在の国道3号  
鹿児島インターチェンジ  
◎ 鹿児島県鹿児島市

## 昭和時代の国道3号

昭和39年（1964）9月10日、鹿児島県庁を出発した東京オリンピックの聖火リレー。東京へ向け旧薩摩街道の国道3号を北上した  
写真／南日本新聞社 提供



## 日本初の上水道ダム 本河内ダム



水源が乏しい長崎は昔から水不足に悩まされてきました。長崎水道は延宝元年（1673）に、倉田次郎右衛門が私財を投じ創設した「倉田水樋」が始まりで、200年余りにわたって水を供給し続けました。

明治時代になると長崎市は人口が増加し、飲料水が不足した上に、コレラが猛威をふるったため、早急に近代水道の必要が高まりました。日下義雄県令は、「港湾都市長崎発展の緊急課題である」と水道設置を決意し、吉村長策を長崎県技師として水道設計監督にあたらせます。中島川上流に明治22年（1889）4月に着手し、その2年後、日本初の水道専用ダム「本河内高部ダム」が完成。横浜、函館に次いで3番目の近代水道となりました。

### 水圧を支える石積み

型枠として石を積み上げ、コンクリートを流

し込む粗石コンクリートダムで、固まった後、積み上げた石がそのまま残る重厚感あふれる外観。取水塔は煉瓦ブロックで漏水対策にモルタル塗布を施しています。

一方、本河内の山間部に近代水道が完成すると、わずか3年目で早くも長崎は水不足に。そのため、下流に「本河内低部ダム」が造られました。設計は同じく吉村長策。大阪市、神戸市の水道工事を歴任し、日本初の重力式コンクリートダム「布引五本松ダム」を明治32年（1899）に完成させた後、佐世保鎮守府の海軍技師となりました。本河内低部ダムは、日本で2番目に古い重力式コンクリートダムとなりました。

昭和57年（1982）の長崎大水害を受け、再開発によって、歴史ある旧堤体を保存しながら、利水に加え、治水機能もあわせもつダムに生まれ変わりました。130年のダムの技術革新と、上水道の進化を知る貴重な場所です。

### 本河内高部ダム・低部ダム見学

高部ダムの銘板は、長崎出身の官僚、伊東巳代治の筆による「水早無増減」。水早（すいかん）は洪水と旱魃のことで、それらがあっても水道水の供給に増減はないという意味

○長崎県長崎市

宮崎県の耳川水系は、急峻で水量豊富な川として知られていました。

この耳川水系の開発に先鞭をつけたのは、当時耳川上流の椎葉村に1万ヘクタールの造林事業を始めていた住友財閥でした。大正7年(1918)に水利権申請がなされ、電源開発のため、大正9年(1920)に許可されています。急速な重工業化によって、水力発電事業が急速に拡大した時期でした。その後、大正14年(1925)、住友財閥を含めた4社で九州送電株式会社(現在の九州電力)が設立され、耳川の電力開発がスタートしました。

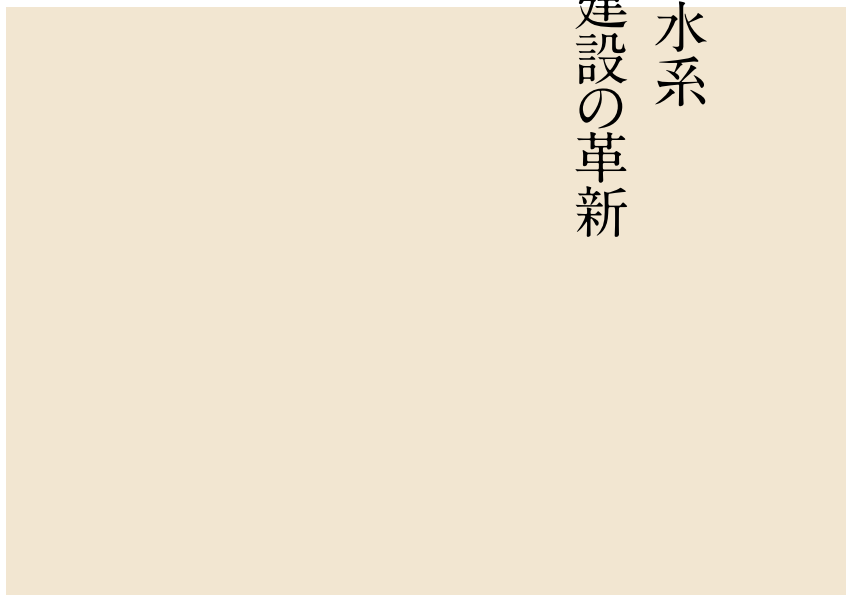
しかし、諸塚から椎葉村までは車の通れる道はなく、舟筏や高瀬舟に頼っていましたが、工事も困難で資金もなく断念。大正15年(1926)の住友財閥による計画

変更に乗じて、西郷村から椎葉村に至る幅員4メートルの道路整備を住友財閥で整備するという計画を結びました。現在の国道327号で、当時財閥が出した総額にちなみ「100万円道路」と呼ばれ、満5年を費やし、上椎葉まで完成すると、トラック輸送が主流となり、物流はスピードアップし、村の暮らしは大きく変化しました。さらに延岡の丸ヶ島から約40キロを索道で繋ぎ、砂やセメント、鉄筋など、40秒間隔で吊し運搬したことは、ダム建設における劇的な変化でした。

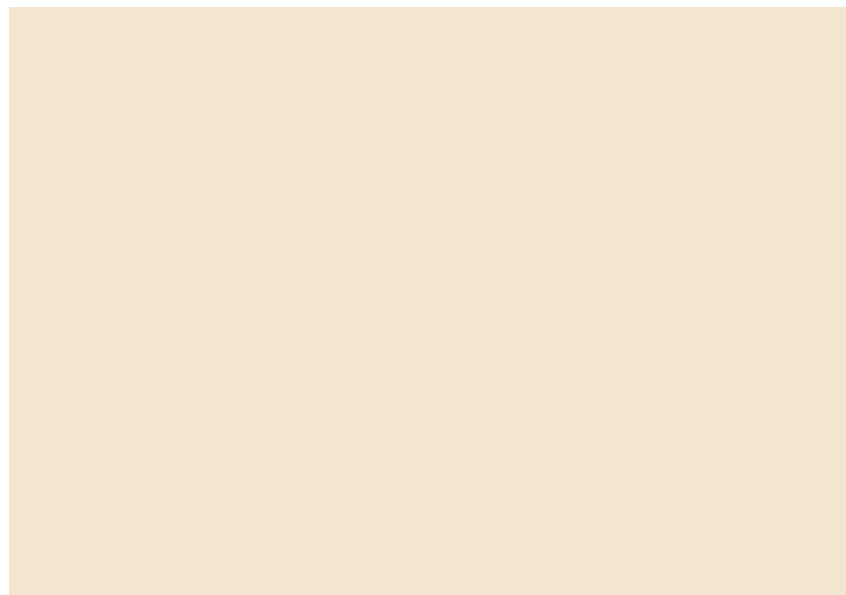
この後、耳川水系には、8つのダムと7つの発電所という、他の河川では稀に見る数の電力施設が、次々に建設されることとなります。

『九州の電力河川 耳川水系の今昔』EFDダム  
「地域と共に歩んだ90年とこれからの百年を自指して」  
九州電力株式会社耳川水力整備事務所 より引用

## 耳川水系 ダム建設の革新



当時の索道基地(延岡市)  
写真/九州電力株式会社耳川水力整備事務所 所蔵



当時の運送の様子(現在の国道327号)



# 機械化技術の先駆け

## 塚原ダム

つかばら  
塚原ダムは、耳川中流域の宮崎県東臼杵郡諸塚村

と西郷村（現在の美郷町）にまたがって建設されたコンクリート重力式ダムです。堤高87メートル。高欄や小塔にほどこされた凹凸は万里の長城をモチーフにしているといわれ、昭和13年（1938）の完成当時、重力式コンクリートダムとして、東洋一の高さを誇りました。

コンクリート材料の開発や、打設には日本初のケーブルクレーンを使うなど、機械化技術が採用され、コンクリートに使用する砂は延岡からの索道で昼夜運搬されました。コンクリートは製造設備、バッチャープラントで現場で製造され、プラントが当時のまま残されています。塚原ダムは、その後の近代ダム建設の礎となりました。

しかし、この大工事では44名もの尊い命が失われました。ダム右岸に建立された慰霊碑。レリーフの女神と工事姿の人びとの姿に、心打たれます。



右／工事中の塚原ダム。中央の建物がバッチャープラント  
上／木で組まれた当時の足場  
右下／現在の塚原ダム 左下／バケットによるコンクリート打設  
モノクローム写真／九州電力株式会社耳川水力整備事務所 所蔵  
○ 宮崎県東臼杵郡諸塚村、美郷町

閣下と呼ばれる  
アーチダム  
上椎葉ダム

上椎葉ダム

特徴は、「スキージャンプ式洪水吐」で、放流した水が中央部分でぶつかることで巨大なエネルギーを相殺し、落下する仕組みで、迫力がある。その風格ある佇まいから、近年ダム愛好家を通じ敬意を込めて「閣下」と呼ばれ、観光放水は多くの人で賑わう

写真／九州電力株式会社耳川水力整備事務所 所蔵

○ 宮崎県東臼杵郡椎葉村

昭和13年（1938）の塚原ダム完成の翌年、電力管理法によって電力事業は国家総力戦の名の下で国家管理されることとなり、耳川を含む全ての水力発電施設と発電用水利権は、日本発送電株式会社が保有することになりました。戦争の足音がきこえる中、八幡製鐵所を始めとする北九州工業地帯への電力供給が重視され、さらなる電源開発が求められます。この中で有力な開発地点として上権葉が選定されましたが、戦局の悪化によって計画は中断せざるを得ませんでした。

しかし終戦後、一日も早い復興をとげるため、北九州工業地帯への送電が重要視されます。日本発送電株式会社九州支店（現在の九州電力）は昭和21年（1946）に早くも現在の位置で測量を開始。本格的な建設事業に乗り出します。耳川の最上流、九州山脈のもっとも奥深く、平家落人の里として伝えられる権葉村で、昭和25年（1950）、戦後初の九州における大規模土木プロジェクト、上権葉ダム建設事業が開始されました。

## 技術の知見は世紀の大事業へと

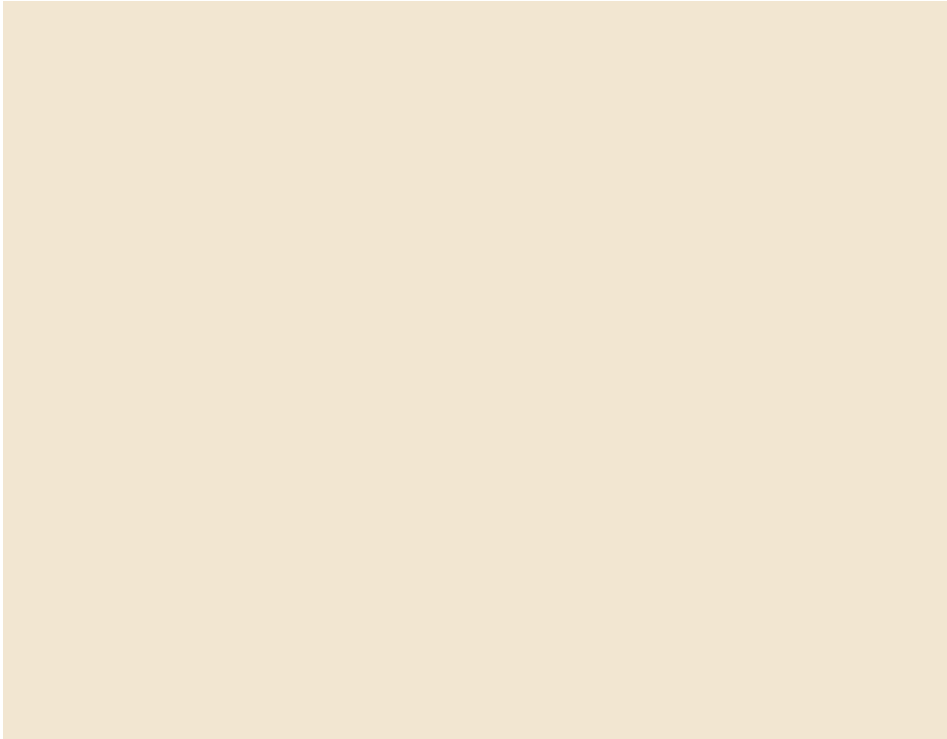
重力式ダムは、ダム自体の重さにより、水圧に耐えるような構造です。一方、アーチ式ダムは、両側の岩盤に圧力を分散させ、水圧に耐える構造となっています。上権葉ダムの建設予定地は、両岸とも堅固な花崗岩であることからアーチ式ダ

ムが選ばれましたが、ダム堤体の厚さをより厚くし、さらに現在主流のドーム型ではなく、直立した円筒型のアーチダムを採用することで、貯水時の莫大な水圧や地震に耐える型式としました。

塚原ダム建設のために造られた索道を更新、延長し、往復で約14000個の搬器が空中に吊され、延岡・上権葉間を約8時間で資材が運ばれました。こうして高さ111メートルの日本初の本格的なアーチダムとして、5年の歳月と、延べ500万人の動員、130億もの巨費を投じ、昭和30年（1955）5月、上権葉ダムは完成しました。耳川水系の水力発電所群の中核をなし、ダムに付設する上権葉発電所によって、最大9万キロワットの電力を北九州工業地帯に送電しています。

毎年襲い来る台風など、完成までの道のりは苦難の連続でした。昭和29年（1954）9月の台風12号による被害は特に甚大で、耳川上流域で総雨量700ミリを超える記録的な豪雨がダム現場を襲います。これにより建設中の上権葉発電所が損壊、建設プラントなど多くの資材が流失し、工事も半年の遅れを余儀なくされるほどの難工事。105人の殉職者を追悼する三女神像が、ダムを一望する場所に建立されています。

ダムの未知なる部分を克服するため、当時の土木技術の粋を尽くして建設された上権葉ダム。このダム建設で得られた知見は、後の世紀の大事業、黒部ダムの建設へと繋がっています。



万歳する工事関係者たち  
右上／ダム上流側底部  
右下／ダム最底部の工事中の仮排水路  
写真／九州電力株式会社耳川水力整備事務所 所蔵





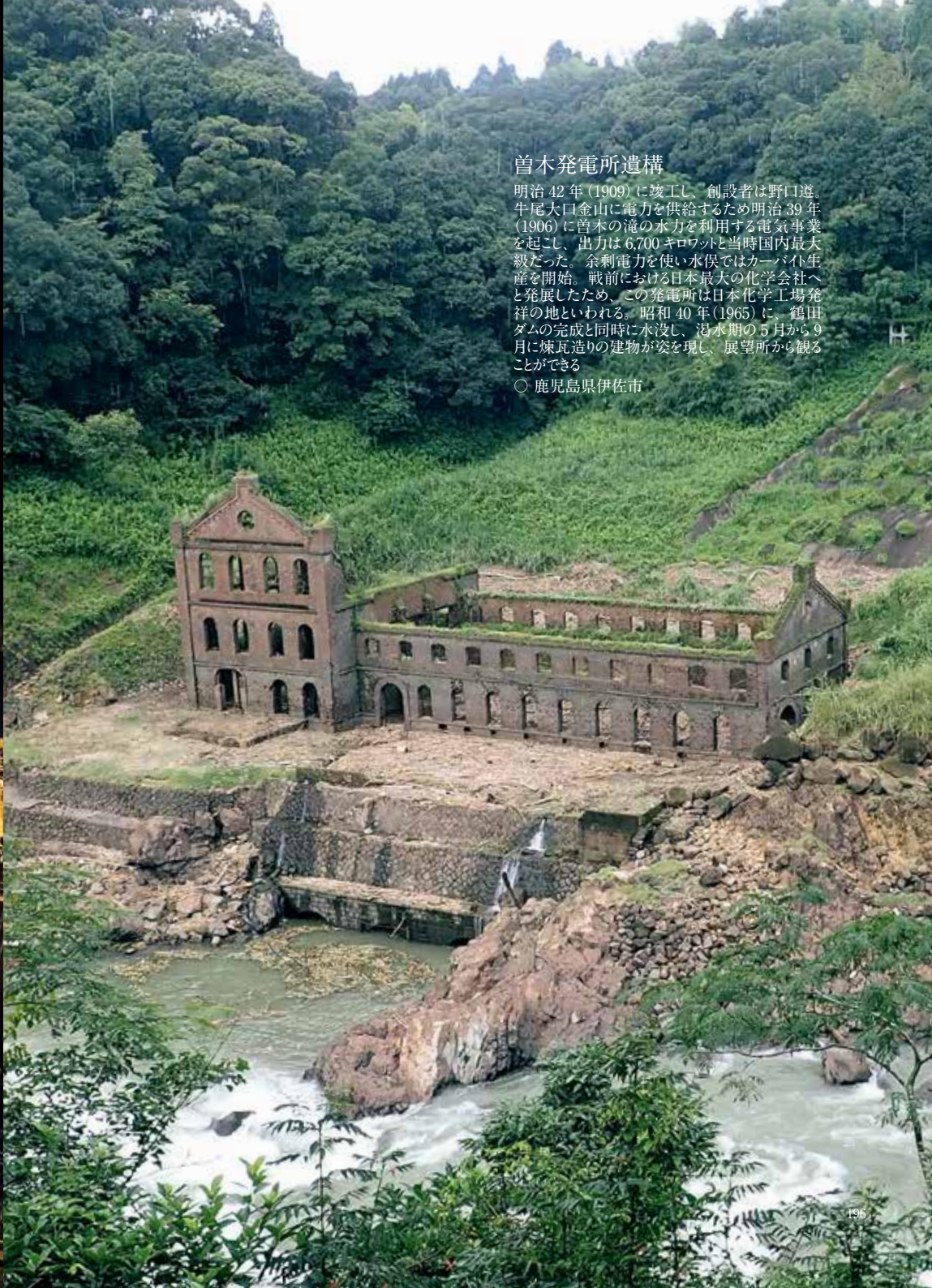


インフラツァー  
今しか見られないダム姿

立野ダムの工事風景

水害や土砂災害から下流の熊本市を守る治水を目的とする重力式コンクリートダム。普段は水をためず、洪水の時は調節を行う。平成28年の最大震度7を記録した熊本地震で建設地周辺に斜面崩壊などがみられ、基礎となる岩盤の状況などの調査が行われた後、令和2年にコンクリートの打設が始まった。令和5年に完成予定

○ 熊本県菊池郡大津町（左岸）  
熊本県阿蘇郡南阿蘇村（右岸）



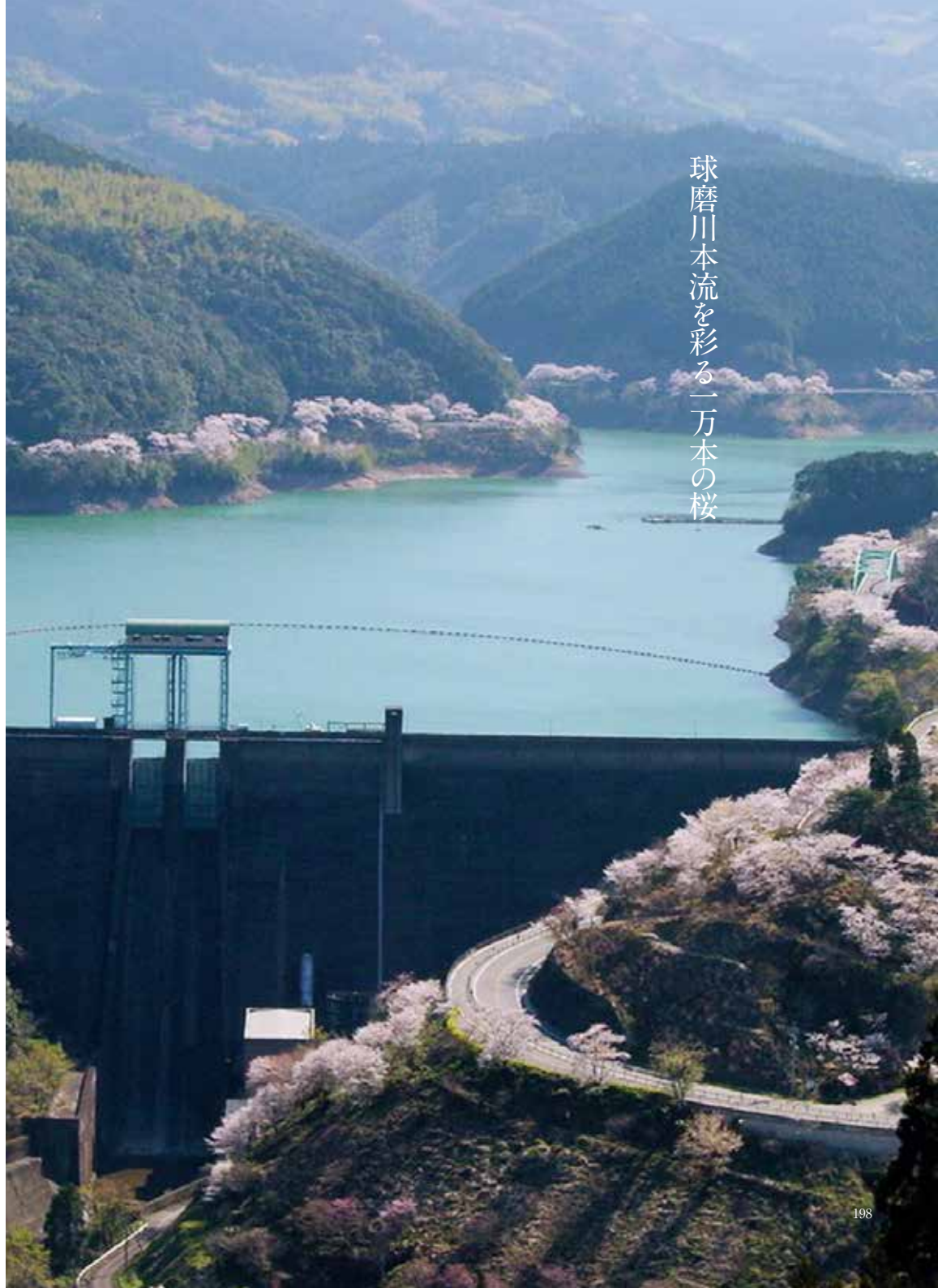
曾木発電所遺構

明治42年(1909)に竣工し、創設者は野口道。牛尾大口金山に電力を供給するため明治39年(1906)に曾木の滝の水力を利用する電気事業を起こし、出力は6,700キロワットと当時国内最大級だった。余剰電力を使い水俣ではカーバト生産を開始。戦前における日本最大の化学会社へと発展したため、この発電所は日本化学工場発祥の地といわれる。昭和40年(1965)に、鶴田ダムの完成と同時に水没し、湯水期の5月から9月に煉瓦造りの建物が姿を現し、展望所から観ることができる

○ 鹿児島県伊佐市



## 球磨川本流を彩る二万本の桜



ダムに花の名所が多いのは、工事に関わった設計者の思いがあるといえます。巨大なコンクリートの塊で、時には集落の暮らしが水底となることもある工事。このダムが人びとに愛され、憩いの場となるようお願い、つくられる植栽計画。熊本県水上村の市房ダムには、春になると二万本の桜が咲き誇ります。

令和2年の7月4日の九州豪雨は、昭和40年（1965）の水害に基づく治水対策の想定をはるかに上回る未曾有の降水量でした。3日夜から4日朝にかけて、線状降水帯が猛烈な雨を降らせ、24時間で400ミリを超える降水量。未明から、ダムの水位は予測を超えた急上昇を始めました。

緊急放流が寸前で回避された市房ダムの管理所長により、紙4枚に青と赤のペンで書かれた緊迫のメモが残されています。午前4時、満水が目前に迫り、緊急放流の目安までわずか10センチ。流域では複数の地点が「氾濫危険水位」を超え、ダムの決壊を避ける放流に踏み切るか、持ちこたえられるのか。水位、予測する水の流入量、指示、市町村との連絡が書き込まれ、そして午前6時半、県が2時間後の放流開始を発表します。

放流30分前の午前8時。雨が弱まり、流入する水は減ると予測が立ち、メモには、最高水位「283メートルは超えない!」、そして「絶対」の文字。放流回避へ大きく動いた瞬間でした。県は午前10時半、正式に取りやめを決め、メモの最後には「中止」の大きな二文字が花丸で囲われました。

このメモは、県によって「歴史公文書」として永久保存されています。

### 市房ダム

発電で使用した水が球磨南部一帯の約3,570ヘクタールの水田などに農業用水として供給される。背景としてそびえるのは霊峰「市房山」

○ 熊本県球磨郡水上村

## 公文書となった

## 九州豪雨の日のメモ

阿蘇のやまなみハイウェイから筋湯温泉へ向かうと、九重連山を背景に大きな水蒸気の柱が見えてきます。

「大分県玖珠郡九重町にある「九州電力八丁原地熱発電所」です。

大正8年（1919）、将来の石油・石炭枯渇に備え、海軍中将山内万寿治氏が石油・石炭の代替熱源として地熱利用調査の結果、大分県速見郡朝日村（現在の別府市）の坊主地獄付近で、噴気孔掘削に成功します。その後、東京電灯株式会社の太刀川平治研究所長が山内氏の事業を引継ぎ、大正14年（1925）11月13日、ついに日本初の地熱発電に成功。その出力は1・12キロワットだったといいます。

地熱エネルギーの熱源はプレートの移動による摩擦熱などで生じたマグマ溜りですが、八丁原地域ではこのマグマ溜りによる火山活動が約20万年前に起きたといわれ、その熱源で現在の地熱貯留層が形成されています。八丁原地熱発電所の運用は、第2次オイルショックの翌年の昭和52年（1977）。現在、1・2号機あわせて日本最大の11万キロワットの出力を誇ります。

年間の発生電力量は約8億7千万キロワット時で、節約できる石油はほぼ20万キロリットル。化石燃料は全く使わず、地下から取り出した蒸気を利用するクリーンな発電で、火力発電のボイラーの役割を地球が果たしています。見学コースは、再生可能エネルギーを学ぶ旅です。

## 地球を感じる 地熱発電所

### 八丁原地熱発電所

蒸気井（じょうきせい）は、地下深部の地熱貯留層から熱水と蒸気を取り出すための井戸で、この蒸気でタービンを回し発電する。30本程度の蒸気井があり、浅いもので760メートル、最も深いもので3,000メートルある

○ 大分県玖珠郡九重町

## 九州は日本初の 地熱発電の地



風景画のように  
記憶に残る道  
やまなみハイウェイ

#### やまなみハイウェイ

千年来、放牧など人の営みによって守られた広大な草原の中を、ゆるやかなカーブで走るやまなみハイウェイ。阿蘇の早春の風物詩として知られる野焼きの後、1週間もすると黒々とした土地が青い絨毯を敷き詰めたように若草に覆われ、放牧が始まる

○ 熊本県熊本市、阿蘇市、大分県由布市



別府市から阿蘇市宮地駅前を結ぶ、全長58キロの大分・熊本県道11号「やまなみハイウェイ」は、牧ノ戸峠の最高点と、1329メートルの標高差があります。山の稜線は走らず、谷や低地をやさしく縫うように収められた道路。トンネルはなく橋もわずかで、ゆるやかなカーブを描きます。そして時として直線になり、視界を遮られることなく、阿蘇五岳と九重連山の遠景を見事に楽しませてくれます。平均傾斜4.5%のゆるやかなアップダウンは、ドライブコースでありながらサイクリストやトレッキングを楽しむ人びとも愛される、日本初のパークウェイです。

## 「九州横断国際遊覧大幹線」 請願

やまなみハイウェイは別府の観光開発に尽力した油屋熊八が昭和2年（1927）に構想した「九州大国立公園実現提唱」が原点とされます。熊八の、別府から阿蘇、熊本、長崎を道路と観光地づくりでつなぐという思いは、4年後に3県の知事らとともに「九州横断国際遊覧大幹線」建設の請願を国に出すまでに現実化しましたが、熊八はこの世を去り、その夢は戦争で手つかずのままでした。

昭和31年（1956）4月、日本道路公団が発足します。経済白書で宣言された、「もはや戦後ではない」が流行語となったこの年、その初の仕事は、道路は無料という常識を覆す一般有料道路建設でした。国立公園として指定された宮崎県の霧島、長崎県の雲仙、そして、くじゅう・阿蘇の山岳道路が計画され、最新的大型重機が投入されます。安全と効率を追求した工事は、後に続く名神・東名高速道路建設に備えたものでした。

しかし、待ち受けていたのは、コンクリートも固まる前に凍ってしまう氷点下の気温と、赤ボク、黒ボク、ボラの崩れ来る火山性地盤との壮絶な闘い。全線開通した昭和39年（1964）は東京オリンピックの年でした。総人員57万7千人、セメント1万2400トン、アスファルト2500トンを投じた歴史、そして殉職者14名の名が刻まれた祈念碑が、長者原から草原を見守っています。

## 種をまく土木工事

やまなみハイウェイでは、土を削り現れる道路両側の法面はコンクリートで固めず、草が根を張るよう種と肥料が吹き付けられました。それさえも、数十センチの霜柱で浮き上がり、崩れ落ちれば別の工法を試みることを繰り返しながら、草原と道路がひとつの絵のような風景は生まれました。野焼きと放牧によって受け継がれてきた草原に、道を描き、種をまく。

重機だけでは為し得ない物語が潜む、やまなみハイウェイです。



やまなみハイウェイの春夏秋冬



日本道路公団の初代総裁は、実業家で戦前より内閣の要職を歴任した岸道三が務めました。昭和37年（1962）3月、在任中に亡くなるまで、高速道路などの大きな事業を次々に手掛けながら、一貫して「景観をしっかりと」という信念をもち続けていました。公団内にはさまざまな分野から道路や橋への「美しさ」についての意見を集める審美委員会もあつたといえます。

この岸総裁の時代に、有料の道路を整備し、通行料で費用を償還していく第1号事業となつたのが「雲仙・島原道路」です。続くやまみハイウェイ、西海橋、若戸大橋、天草五橋など、歴史に残り、後の女神などの高速道路へと繋がる事業が九州で次々に行われました。

「クロソイド曲線」とは、人間の運命の糸を紡ぐとされるギリシア神話の女神クローソーに由来するもので、イタリアの数学者アーネスト・チェザロによって名付けられた緩和曲線です。ドイツのアウトバーン建設で、

道路線形として世界で最初に採用されましたが、九州では雲仙・島原道路や、やまみハイウェイに採用され、道路公団が目指した「美しい道路」の先駆けとなりました。ハンドルを一定のスピードで回した時に車が描く緩やかな曲線のこと、カーブでのスムーズなハンドル操作を可能にし、風景を楽しみながら、しかも安全に運転することができ、

現在の道路には多く採用されていますが、技術者たちは、その当時初めてのクロソイド曲線に、算盤と手回し計算機、計算尺で挑みました。点々と中央線に杭を打ち、複雑な地形の中、イメージ通りに綱を張って道路線形をつくっていく根気のいる現場でした。GPSもない時代、一番確かだったのは技術者たちの目、肉眼だったといえます。

忘れ得ぬ風景の陰には、土木技術の歴史に残る、美しい道路があります。

## 日本の美しい道をつくる クロソイド曲線

### 朝焼けのミルクロード

阿蘇西麓の大津町付近の県道339号から12号、45号を経て、外輪山の北東部へと至る全長約45kmの美しいドライブコース。草原は、秋は風に揺らぐスキ野となる

○ 熊本県阿蘇市、菊池郡大津町





### 白払砂防堰堤

現在、管轄内の砂防指定河川が100を超える福岡県八女土木事務所が、最初に行った砂防工事で建設された堰堤

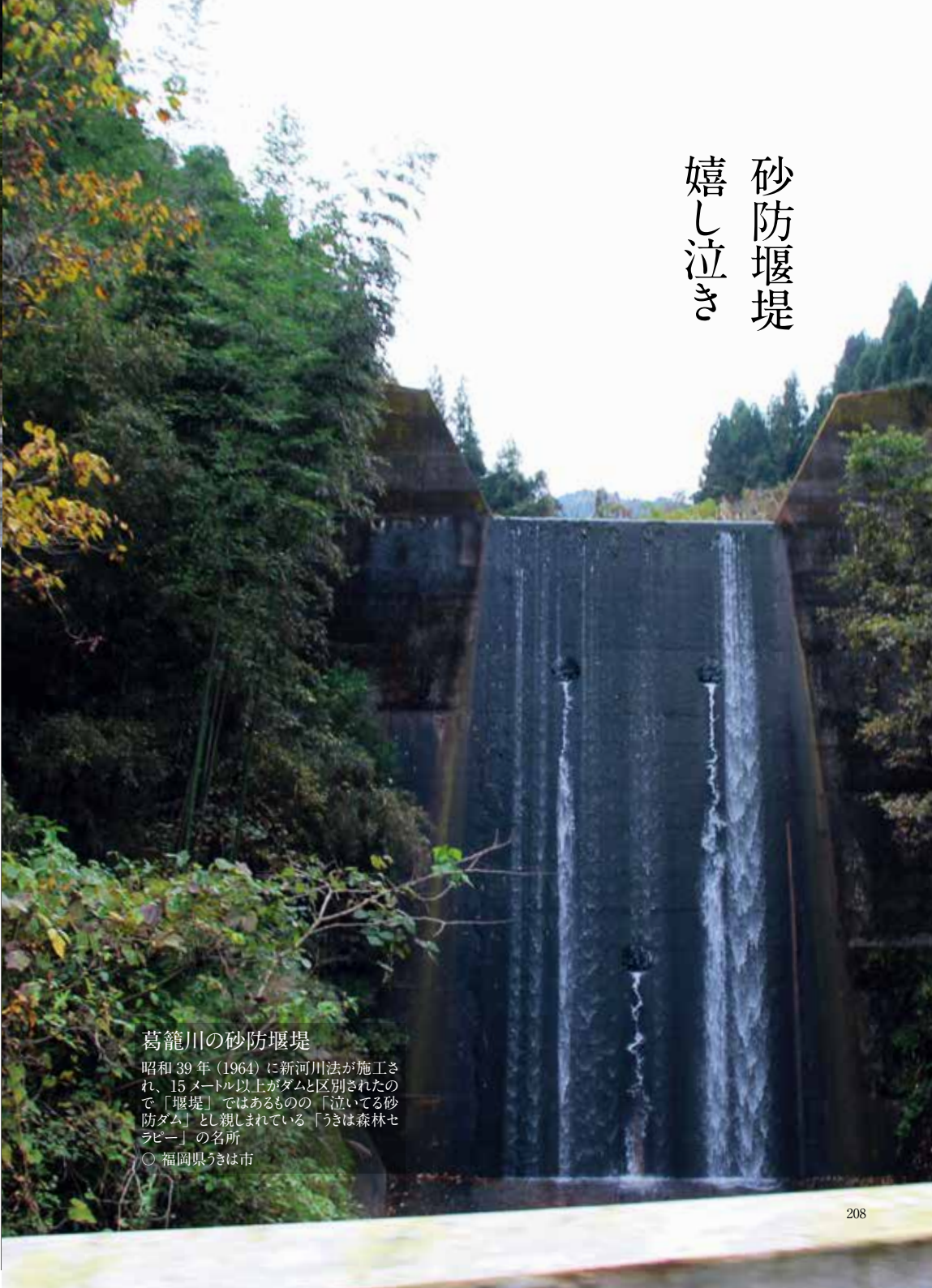
○ 福岡県八女市矢部村

### 大石転がる急流で

山を川沿いに歩くと、ある「顔」に出会います。3つの水抜き穴から流れ出る山水が、まるで涙を流しているかのよう。台風や豪雨のときに上流からの土砂を受け止め、下流に流れる量を調節する砂防堰堤、そして砂防ダムの風景です。同時に川の勾配がゆるやかになり、川底や河岸が削られるのを防いで両岸の山裾も固定し、山や斜面の崩れを防いでくれる、そんな役目がわかると、なんだか嬉し泣きにも見えてきます。

狭い溪谷の急流を静かに守る「白払砂防堰堤」は、福岡県八女市を流れる矢部川支流の白払川に造られた砂防堰堤で、昭和16年(1941)に完成しました。当時の事業費は、1万1千423円。昭和26年(1951)に建設された下流の同規模の堰堤の事業費は金額で約140倍となり、戦後の防災、国土強靱化がいかに旺盛だったかを物語っています。

### 砂防堰堤 嬉し泣き



### 葛籠川の砂防堰堤

昭和39年(1964)に新河川法が施工され、15メートル以上がダムと区別されたので「堰堤」ではあるものの「泣いてる砂防ダム」とし親しまれている「うきは森林セラピー」の名所

○ 福岡県うきは市



## 世界に誇る 命を守る砂防技術

### 桜島の溶岩砂防ダム

土石流や火山活動の監視を行っている「桜島国際火山砂防センター」では、火山活動から砂防施設まで、噴火の歴史を学ぶことができる。普段、目にする事のない実際の桜島の土石流の映像も公開されている

○ 鹿児島県鹿児島市



鹿児島湾は、約2万9千年前に海底火山が巨大噴火をおこし、陥没によってできたカルデラです。そのおよそ3千年後に、その南端で始まった噴火活動によって桜島が誕生しました。20世紀最大の火山災害、大正3年（1914）の大正噴火では溶岩流が瀬戸海峡へと流れ込み、大隅半島は陸続きに。「薩摩藩造船所」は黒神集落とともに火山灰と噴石に埋もれ、上部をわずかに残す「腹五者神社」の「埋没鳥居」が、そのすさまじさを今に伝えています。

平成2年11月17日、198年ぶりに火山噴火活動を再開した長崎県島原市の雲仙普賢岳では、その翌年、水無川流域において大火砕流が発生しました。度重なる火砕流や少しの雨でもおこる土石流で2500棟にもぼる家屋が被災し、国道や島原鉄道などの交通網を寸断しました。作業員の命を守るため、重機などを遠隔で操作する無人化施工の先駆けとなったのが「水無川1号砂防ダム」。その後も土石流や、大規模爆発の溶岩流を安全な方向に導く導流堤や砂防堰堤が整備され、集落を見守っています。

## 海外でも「SABO」

土砂災害を防ぐほか、復旧工事、災害がおこる仕組みの研究や避難指導も「砂防」の仕事です。3分の2を森林が占める日本には、9万基以上の砂防ダムがあり、その技術は高く、諸外国にも指導を行ってきました。戦後の復興期、昭和25年（1950）頃から海外でも「SABO」と呼ばれている、日本が世界に誇る土木技術です。



「島原半島ユネスコ世界ジオパーク」の「土石流被災家屋保存公園」に残る、2.8mの厚さの土砂に埋もれた家屋の姿

○長崎県島原市





上／子どもたちにも語り継ぐ、宮崎「橋の日」実行委員会作の絵本  
 左／一夜にして海に没したといわれる外所地区に建つ「外所地震供養碑」  
 ○宮崎県宮崎市

## 決して忘れない とんとんころと畳堤

### 外所地震供養碑

「日向の国地大いに震し、且つ、津浪俄かに来たりて…古今未曾有の大災なり」。寛文2年(1662)9月19日、日向灘沖を震源とするマグニチュード7・6の大地震で、宮崎県の大部分で震度5以上の揺れがあり、高さ4から5メートルの津波が宮崎県から鹿児島県大隅半島へ押し寄せました。飢肥藩領を中心に死者200人、家屋倒壊は3800棟に上ったとされます。

7つの石碑が並ぶ宮崎市熊野地区にある「外所地震供養碑」は、およそ50年ごとに地元の人々が新しい石碑を建てて法要を行い、350年以上に渡り記憶が次の世代へと引き継がれています。

### 特殊堤防 畳堤

延岡市の五ヶ瀬川沿いにある高さ60センチの橋の高欄に似たコンクリート製の堤防には、上から見ると幅7センチの隙間があります。

台風などで川の水が堤防を越えて氾濫する前に、この隙間にすっぽりと畳を立ててはめ込み、洪水を防ぐ仕組みで、大正から昭和にかけてつくられ正式名称は特殊堤防「畳堤」といいます。全国に3つしかない貴重な土木遺産です。

平成13年に「五ヶ瀬川の畳堤を守る会」が設立され、保存活動と歴史の伝承を行っています。自ら守るという先人の発想が、何より河川への防災意識のシンボルとなっている畳堤です。



### 五ヶ瀬川畳堤

現存している畳堤は船倉町、紺屋町、中央通の一部、祇園町の一部、北町の五ヶ瀬川沿い。昔は大瀬川沿いにも設置され総延長は2000m、約1,000枚の畳が必要になる距離

○宮崎県延岡市



# 展望台から 防災を考える 虹の松原

大小の島々と美しい海岸線が織りなす白砂青松の風景。佐賀県の唐津湾沿いに、虹の弧のように連なる松原は、唐津藩初代藩主、寺沢志摩守広高が、潮風から田畑を守るために海岸線の砂丘にクロマツの植樹を命じたのが始まりとされています。その長さから江戸時代には、「二里の松原」と呼ばれましたが、いつの頃からか「虹の松原」と呼ばれるようになりました。

藩政時代は唐津藩が直轄する小山として伐採を禁じ、一定の年貢を

納めた者に、松原内で燃料用に落ち葉などを採取することを許していました。人が手を入れることで、松原には松露しょうろも生え、昔はさのこ狩りも楽しまれていましたが、電気、ガスの時代となり、荒れた暗い森となった時代もありました。

このままでは虹の松原がなくなってしまうと、立ち上がった地域の思いに共感した人びとが集まり、植樹や松葉かき、草刈りなど再生と保全活動が行われています。海からの強い季節風から暮らしを守る、変化に富んだ枝張りの松は、100万本ともいわれます。防風、防潮だけでなく、地震による津波を軽減するという機能もあるという松原。

今ひとたびの防災を考える、土木遺産です。

虹の松原  
○ 佐賀県唐津市

## 人を思い技術を知る 土木遺産の味わい方

ふだん何気なく通る道路にも、土木設計者と工事関係者の  
思いが潜んでいます。

使う人のことを思い、見える景色を想像しながら描かれた設  
計図、その線に沿って大地に打った杭から始まる工事で、道路は  
できています。ダムは巨大な土木遺産ですが、昔は、その道な  
き道を何万トンもの材料を運んでつくられ、電気、上水道、防  
災と、暮らしに深く関わっています。

共感を深めてもらおうと、その土木構造物の工事現場や内部  
を特別に一般公開する「インフラツアー」が各地で開催され、話題  
です。参加したみなさんによる土木技術の粋を体感した感動の  
輪が、SNSでも広がっています。

土木遺産な旅の  
ポイント

6

人を想像する

日本初の上水道ダムの  
旧堤体は保存しながら  
新堤体がつくられました

技術者冥利に  
かなすね

本河内高部ダムの監査廊  
○長崎県長崎市